

技能実習生と日本語能力試験（JLPT）

日本語教師 菅原ゆき子

コロナ禍で留学生が入国できなくなった影響で、東南アジア出身の技能実習生を対象にした授業に関わるが増えた。その中で、実習生たちに日本語能力試験（JLPT）N2合格を目指させる企業が多いことに疑問を感じている。

日本語能力試験（JLPT）とはその名の通り、日本語を母語としない人を対象とする日本語の試験で、N5～N1 まで5段階のレベルがある。そのうち N2 が大学などへの進学や就職時に基準とされることが多いレベルである。

確かに日本語能力試験は、海外でも実施されていて、日本語の試験の中で受験生が最も多くポピュラーである。それで、日本社会に外国人労働者が増えてきた昨今、彼らに関わる日本人側にもこの試験の存在が知られてきたようだ。

しかし、すべてマークシートの4択問題（一部3択もあり）で、記述問題や口頭で答える問題は一つもない。2010年の改定で、科目ごとに足切り点が設けられたり、語彙・文法の知識よりも聴解・読解などの運用力を見る問題にウエイトが置かれたりするようになったとは言え、この試験の合否のみによって留学生の進路指導にあたる日本語学校の教師はまずいないだろう。現に母国でN2、N1に合格したと言って来日しても、会話はほとんどできず初級クラスからやり直し、という留学生も少なくない。試験内容も、留学生や事務系の仕事を目指す人ならともかく、実習生の仕事や生活に合っているとは思えない。

そのような試験を、非漢字圏出身の技能実習生に、仕事の合間に勉強させ、合格を目指させるメリットは何なのだろうか。

現在、介護士として働いているミャンマー人女性5人の授業（日本語能力試験 N2 対策）をしているが、その企業の担当者によると、この試験の合否を査定に反映させるのだそうだ。しかし当の彼女たちが勉強したがっているのは、実際の介護現場で使う語彙の漢字であったり、施設利用者との会話で役に立ちそうなフレーズであったり、引継ぎの際に要領よく話す力だったりするようだ。当然であろう。日本人と同様週5日（仕事によっては週6日という所も）勤務し、その上実際の仕事とはほとんど関係のない内容の試験を受けるための勉強をするというのは、どれほどの負担だろうか。また、日本人側にとっても、勉強させているのにいつまで経っても日本語（仕事）ができない、ということになりはしないのだろうか。

企業の担当者は「私たちは日本語に関しては素人なので…」と言う。そこでとりあえず日本語能力試験の結果を拠り所にしていただと。ならばなぜ最初に、目標設定や授業内容について「日本語に関してプロ」である日本語教師に相談してくれないのだろう。

日本語能力試験は、あくまでも目安の一つに過ぎない。日本語の勉強の仕方は一様ではなく、ましてや試験対策のみではなく、対象者のニーズによって何通りでもある。そしてそれら様々な学習者のニーズに対応できるように日本語教師は日々腕を磨いているのだ。「現場のプロ」と「日本語のプロ」が両輪となって、彼ら実習生を支えていきたいものだと思う。（グローバル教育フォーラム運営委員）